

複数時間で展開する道徳科授業に関する一考察

～「生命の尊さ」を主題とする人物教材について関連価値をともに考察させる試み～

東京学芸大学附属小金井小学校 遠藤 信幸

1 はじめに

2017年より「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」として新たにスタートした。「特別の教科 道徳」となり、目標や指導過程に変更や改善がみられるが、「特別の教科 道徳」はまだ改訂したことによる良さを十分に引き出しきれていない印象をうける。

「道徳の時間」として道徳の学習が行われていた時は、指導過程において「展開後段では振り返りをする」という基本型を絶対行うという考えや「教材は分断してはいけない」という教材の使用法を固定する考えがあった。これらの「道徳の授業はこうあるべき」といったいくつかの固定化された道徳授業の考えは「特別の教科 道徳」に改訂されてもなお色濃く残っている。よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うという大きな目標のもと、「特別の教科 道徳」ではさらなる授業の在り方を進化させるべきである。コロナ禍における人々の不安や偏見をぬぐい、差別のない社会を担う子どもたちの道徳性を養うことは大事な社会的課題であり、「特別の教科 道徳」の担う役割は一段と大きい。

2 問題の所在と研究の目的

(1)問題の所在 歴史・現状・課題

道徳科の学習は「一主題一時間」で完結すべきであるのか。否である。道徳科の学習を「一主題一時間で行う」と規定する言葉は、1985年に「道徳の時間」の学習が特設されて以降、2017年の小学校学習指導要領解説まで「原則」とする明確な記載はない。ただ「一主題一時間」であるという意味がとれるのは、2008年の小学校学習指導要領解説に「一般的に一つの主題を1単位時間で取り扱う」¹⁾と記載されている。これは「一般的」であって絶対ではない。また、2015年の小学校学習指導要領解説には「各学年段階の内容項目について、相当する各学年において全て取り上げることとする。」²⁾とあり、各学年のすべての内容項目を35時間の中で行おうとすると、「一主題一時間」で実施していかなければ35時間の中で終わることができない。そういった時間的な理由も考えられるが、しかし、なぜ今まで道徳の時間は「一主題一時間」でなければならぬ固定概念があるのだろうか。

その訳についていくつかの文献をもとに考えてみる。藤田(1985)は「文科省『小学校指導書道徳編』(1978年)は、「道徳資料の具備すべき要件」の一つとして、「時間内で扱える資料」ということをあげている。ここに「時間内」とあるのは、通常、一単位時間内をいうものと解されている。いきおい、「道徳」の資料は、高学年においても、なるべく短いものとならざるを得ない。その量的制約が、時には原作の価値をも損ねつつ、資料を概念的・抽象的なものとしがちである。ここには、「道徳」の時間が毎週一単位時間として固定的に配置されていることのマイナス面が現れている。時には、隔週に二時間というような配置も考慮されてしかるべきであろう」³⁾と述べており、一つの要因として、道徳で扱う「資料」の問題を問うている。道徳の学習で使われている資料について、塩見(2009)は「道徳の時間の教材としては、民間の教材会社の開発・刊行する副読本が多く用いられ

る。2003年に文部科学省の実施した「道徳教育推進状況調査」によると、小学校の81.5%、中学校の70.8%で民間の副読本が使用されている⁴⁾とし、副読本が広く使用されてきていることを述べている。そして、副読本の教材は一主題一時間で設定されている。さらに、そうした副読本を使った授業について佐藤(2009)は「これまで一般的に行われてきた「基本型」による道徳授業から一歩進んだ新しい授業をつくる必要がある。「基本型」とは、名前の通り道徳授業の「基本」となる「型」に則った授業である。」⁵⁾とし、その「型」を「導入では内容項目に関することを話題とし、展開前段では副読本資料の人物の気持ちを問い、展開後段では自分の経験を振り返り、終末で教師の説話をする」⁶⁾と述べている。以上のような「副読本を用いた一時間完結型の基本型の一般化」の広がりによって、道徳の時間が「一主題一時間」と定義づけられてきたと考える。

しかし、道徳の学習は「一主題一時間」を原則としない考え方はある。小学校学習指導要領になんと記載されているか。1999年より初めて小学校学習指導要領解説道徳編では「複数時間」という言葉が記載されている。第4章では「重点的指導」と関連させて、授業を一時間で終わらせるのではなく、より効果が期待されるような授業構想が記載されている。具体的には「中心的な資料に他の副次的な資料を関連させて用いていく進め方、中心的な資料をもとに数時間かけて深めていく進め方」⁷⁾とあり、具体的な授業の方法が示されている。2008年以降にも若干の言葉の変更はあるものの小学校学習指導要領解説の「指導計画」に記載が見られる。これは複数時間の道徳授業実施に向けた教育行政の示唆であるといえる。また複数時間の学習を提唱している論者もいる。新宮(1986)は「道徳の授業を開いて、活性化をはかる」とし「(2)時間を開く。一主題一時間という固定化した方法から、一主題多時間へと広げる」⁸⁾と述べており、「一主題一時間」という授業の方法を問題視している。押谷(1994)は総合単元的な道徳学習を提唱している論者であり、総合単元的な道徳学習を「経験単元、教材単元を総合的に捉え、各教科や特別活動等の各教育活動の特質を生かしながら、共通した道徳的価値に関する学習内容について、道徳の時間を中心に、有機的なまとまりをもたせた学習活動を計画すること」⁹⁾と捉えており、齋藤(2020)は実践研究論文の中で押谷が提唱している総合単元的プログラム型道徳学習の一実践をあげている。

「特別の教科道徳」の授業改善として、まずは「一主題一時間」という枠を超えて、「複数時間」の展開における様々な道徳授業の実践や必要性を感じる。

(2) 研究の目的

そのような中、本稿では「複数時間の授業設計」から児童が授業の課題を自分事として追究していき、自己の生き方や在り方を主体的に考え深めていくことができる複数時間の授業を構想していく。「複数時間の授業を設計し、授業を展開することで児童が教材や道徳的価値について問いをもち、課題解決に向け多面的・多角的に考え、自分の生き方を創りだすだろう」と仮説を立て、実践研究を行った。

3 研究の方法

(1) 複数時間の設定

本実践では複数時間の道徳授業の構想を小学校学習指導要領解説道徳編に記載されている複数時間の展開の内容と田沼のユニット論とを重ね合わせ、複数時間の設計を行う。

小学校学習指導要領解説道徳編には1999年から「複数時間」の展開の方法が書かれている。1999年からは「第4章道徳の時間の指導第4節学習指導の多様な展開 1 体験活動を生かすなど多様な学習指導の構想(4)複数時間扱いの学習指導」にある「中心的な資料をもとに数時間かけて深めていく進め方」¹⁰⁾に着目する。そして、2008年からは、「第4章道徳の指導計画第3節道徳の時間の年間指導計画 3年間指導計画作成上の相違点と留意点(6)複数時間の関連を図った指導を取り入れる」にある「一つの主題を2単位時間にわたって指導し、道徳的価値の自覚を一層深める方法」¹¹⁾に着目する。

田沼は一主題一時間ではない道徳授業として「道徳科パッケージ型ユニット」理論を提唱している。「道徳科パッケージ型ユニット」の内容を田沼(2022)は「テーマ性によって関連づけられた複数価値を複数時間で小単元として構成し、子供自身の「問い」を一貫させることで個々の道徳学びのストーリーを意図的に紡ぐ道徳科教育学的な視点による授業構成論」¹²⁾と述べている。理論をもとにした具体的な授業の姿として田沼は「重層型ユニットタイプ」を提案している。これは「同一の価値内容を複数時間重ねることで設計テーマへの深い学びを促す」授業である。大切な点は子供自身が授業において自分の「問い」をもつことである。どう問いを生み出していくかは(2)に述べる。

以上の2つの理論から本実践では、複数時間の道徳授業を「一つの主題を中心的な資料をもとにして2単位時間で深めていくユニット」学習と設定する。

(2) Forms の活用による問いの設定

道徳の学習では、子ども自らが考えたいテーマや問いを設定したり、生み出したりすることによって、子どもが道徳的価値を自分事に置き換え、自分自身の生き方やあり方を見つめることができるようになる。そのためにもテーマや問いをどのように授業で子どもたちによりそった形で設定していくかが授業の鍵となる。本実践では教材や価値に対して子どもたちが個々に感じたことや考えたことを視覚的につなぐ手立ての一つとしてMicrosoft Formsを用いる。Formsは個々の考えや意識を集約するのに非常に適したツールである。Formsから「生命の尊さ」についての個々の考えを集約した後、それらをテキストマイニングでまとめ、価値についての理解を視覚的に図ることができるようにする。

4 授業の実際～6年生「最後のコンサート-チェロ奏者・徳永兼一郎」(光村図書)

(1)単元構成

主題名	精いっぱい生きるとは	
内容項目	D19 生命の尊さ 関連価値(D22よりよく生きる喜び)	
教材名	最後のコンサート-チェロ奏者・徳永兼一郎(5年 光村図書)	
時間	1時間目	2時間目
ねらい	「精一杯生きる」という意味について自分の考え方を見つめ、教材の人物の生き方が「精一杯生きている」ことになるかどうか判断する。	人物の生き方を通して、精一杯生きるとはどのようなことであるのか、自分はこれからどうしていくのかなどを考え、自他の命を大切にし前向きに生活していく心情を育てる
展開	①精一杯生きるという価値について今の自分のとらえを見つめる ②精一杯生きるとはどのような意味であるか伝え合い、理解する。 ②教材を読んで感想をもつ。 ③徳永兼一郎の音楽を聴いて感想を交流する	①教材の徳永兼一郎の思いを考える ②精一杯生きることはどういう意味か考える ③これからの自分の生き方について考える

(2) 1 時間目の展開

本実践の教材についてであるが、光村図書の6年生「最後のコンサート-チェロ奏者・徳永兼一郎」の教材を用いた。教材の概要であるが、がんの病に倒れながらも死の間際までチェロの演奏に打ち込んだ徳永兼一郎の姿を描いた物語である。自分の命の限りを感じながらも最後の力を振り絞ってすばらしい演奏を行う徳永兼一郎の生き方から「精一杯生きる」とはどういうことなのか、「自分はどのように生きているのか」について考えさせていくことをねらいとした。

1時間目には、年間35時間のうちの1時間目である「生命の尊さ」の「精一杯生きる」という価値について子どもたちがどのような考えをもっているのかを知る段階とした。まずは二時間を貫くテーマとして「精一杯生きる」とはどういう意味でしょうか」と問うた。数人から意見を聞いた後、Formsを使って意識調査を行った。調査する内容は「精一杯生きるとは」「精一杯生きている人」「自分の命をどんな風に思っているか」の3つとした。「精一杯生きるとは」については、道徳的価値についてどのように理解しているかを、「精一杯生きている人」については自分の価値のとらえから具体的な人物をどのように設定する

精一杯生きるとは	精一杯生きている人	自分の命をどんな風に
周りの人、物にすべてをかけている人	イチロー（野球） 徳川家康	一度しかないことだから大切にしたい
何かを背負ったりして生きていく人	選手やかんとく 警察などの人	やらなきゃいけない事をやってこそ命
いろんな感情を持つこと	志村けんさん いけえりかこさん	すごく大切に思ってる。
命を大切に使う事。	キリスト	無くなったら困るもの
自分や他人の為に生きること	杉原千畝 野口英世 エイブラハム・リンカーンなど	自分が自由に自分の目的のために使えるもの
諦めない	ナイチンゲール 藤子不二雄 やなせたかし	大切・この世に一つしかない

表1 意識調査の一部抜粋

るかを、「自分の命をどんな風に思っているか」について子どもたちが自分の命というものをどのように捉えているかを、それぞれ把握することを意図とした。表1は一部の子どもの記述であるが、「精一杯生きるとは」については、多面的に捉えていることがわかる。

その後、一人一人が考えている「精一杯生きる」に

ついて互いに表出し合い、自分の考えと比べて見つめ直すために話し合いを行った。子どもたちからは「一瞬を大切に作る」「自分も人も生かせる」「あきらめない」などの様々な意見が出された。子どもたちの意見の中に「他者」に視点を置いたものが見られたので、2時間目では「他者への意識」をより持たせたいと考えた。

ここまでは道徳的価値について子どもたちの今ある知識や経験の中での考えから授業を展開してきた。さらに価値を見つめるために教材を提示した。教材の提示後に、より深く教材の人物の生き方について考えをめぐらすために教材の一場面の実際の映像を子どもたちと視聴した。子どもたちは興味深く映像を視聴していた。授業の終わりに家庭学習として、「調べ学習」用プリントを配布し、全員で取り組む課題とはせずに、若干の自由度をもたせ、1時間目が終わった。

(3)家庭学習としての展開

調べ学習として、教材の人物の「徳永兼一郎」について調べることを家庭学習として設定したが、実際に調べてくる子は少なかった。2時間目の授業開始時に「調べてきた子いますか」と聞くと挙手した子は、34人中15人と半数を超えなかった。調べてきた子とそうでない子とで、授業に向かう意欲や価値への向き合い方に差があるかどうかは授業の様子からは一概に論じることができないが、意図的に調べさせる

1941年4月26日生まれ。亡くなったのは、1986年5月17日。職業は指揮者
T.シベリウスの音楽。NHK交響楽団首席。本名：徳永健一郎。桐
桐学園大学中退。8才で小野アンナにバイオリンを学ぶ。10才で
チェロに転じ、斎藤秀雄の元で学習。昭和32年桐朋女子高校7.39年
N響入団。さらに1948年、シモン・ゴットホルダー・ノースに学ぶ。
1952年以降は、独奏者として、リサイタルの他、東響、京都市響や読売響、また
札幌響などの共演もいる。東京八重奏団にも入った。室内楽にも
活動している。東京音楽大学、桐朋学園大学でレクチャー。
受賞(有馬賞(第3回) 1983年、音楽コンクール・チエロ部門第1位特賞 1981年)
家族：父 徳永茂 バイオリニスト
母 徳永扶美子 ピアニスト
弟 徳永三男 バイオリニスト

図1 児童Aのワークシート

ことでより教材の人物に共感させることはできたと感じる。図1は興味をもって調べてきた児童Aのノートである。児童Aは人物に興味をもち、経歴等細かく調べてきていた。児童Aが「精一杯生きるとは」というテーマについて、授業の終末に書いた文章は「自分のやりたいことをつきつめていって、それで人を喜ばせたり、楽しくできること。一生懸命だな、がんばっているなど思ってもらえると、見ている方も心が温まる」である。児童Aが始めに書いた文章は「自分に今、出来ることをする」であったため、文章の量とその内容の両方を鑑みても、児童Aの道徳的価値の理解は深化が見られる。「教材やテーマについてその意味や実態を調べる」ことは道徳的価値の理解を深める上で効果があると考えられる。

(4)2時間目の展開

A:学習指導過程

学習展開と発問
1. 「精一杯生きる」について前時を振り返る。 ① 「精一杯生きる」とはどういうことだろう。
2. 教材「最後のコンサート」を読んで話し合う。 ① 3月2日の東京でのコンサートに向けて兼一郎はどのような思いで練習を続けていたのでしょうか。 ② 3月21日のホスピスでのコンサートに向けて、兼一郎はどのような思いで練習を続けていたのでしょうか。 ③ 徳永兼一郎さんの姿から精一杯生きるとはどういうことだと考えますか。 ④ 精一杯生きるとは何でしょうか。先にはどんなことがあるのでしょうか。
3. 自分の生活を振り返る。 ① 今日のお話から自分が大事にしたい考えや思いはなんだろう。 ② 自分のこれからについて考えよう。
4. 今日の振り返りをする。

導入では前時での児童の道徳的価値に対する理解の紹介からテーマを確認した。展開では教材の人物の生き方について考えるために、3つの発問を設定した。自己の生き方あり方を振り返らせるために、今日の学習の気づきを記入する展開とした。学習のまとめは授業の流れによって教師の説話を設定した。

B:実際の授業の様子

始めに前時に Forms で子どもたちに問うた「精一杯生きるとはどういう意味か」「自分の命をどんな風に考えているか」についての集計の結果を、テキストマイニングにして提示した。A4の用紙に上下に分けて提示し、学級全体の道徳的価値についてのとらえを視覚で捉えられるようにした。子どもたちからは「命がどっちも入っているから大事」「精一杯生きるとは気持ちが上向いている。うれしいとか。幸せとか気持ちが上にいっている。命については失うとかちょっと気持ちが下がっている言葉が多い」「命については一番多く生きるとか、生きるところとか生きるについてのことが書いてある。自分の命は大切とかで大事とか贈り物とか。命がどちらにも入っている」など児童はテキストマイニングについて気づいたことを発表していた。その気づきからテーマを子どもが本時に合わせてさらに自分たちにあったテーマに変える可能性があると考え、「テーマについて何か付け足したい言葉はありますか」と問うた。授業者の意図に反して、子どもたちからは反応がなかった。「精一杯生きる」というテーマが本時の学びとして最適であると認識しているといえる。

展開ではまず、登場人物の徳永さんの2つのコンサートに向けた思いについて話し合った。子どもたちからは徳永さんの「他者を喜ばせたい」思いに関連する発言が多く見られた。徳永さんの周りの人のために命の限り、精一杯生きる姿に気づくことができた。さらに「精一杯生きる」という姿を通して、「自分の壁を越える」「最後のコンサートだから全力を出す」「限界まで弾く」などの発言も見られた。「精一杯生きる」姿から「希望・努力」の内容項目の意味が引き出さ

T:みんなは前時から「生きる」「命は大切」とあったけど、精一杯生きる、これは大切にしているかな?無理しないでということなんじゃないの?みんなの意見からは。この生き方は大事にしているのかな?(近くの人と)

T:ではどうぞ

C:人生の最後を人を楽しませることに使った方がいい。ベッドに寝ているのではなく、人を楽しませることに使いたい。

C:自分の壁を超えるにつながるけど、残りの時間がない人たちがいる場所でそういう時に、徳永さんは最後まで人を笑顔にさせることは自分が一番したいこと。私たちは自分がしたいこと、徳永さんにとっていいことになるから、それぞれ命を大事にしているって違うと思って。例えば、寝ているが一番自分にとって安らいでいると感じていけば、その人は寝ていることが命を大事にしていることになって、今回のことは自分を超えて、人を笑顔にすることが徳永さんにとって命を大事にしていることになる。

C:なんか人の役目、命があることに役目がある。徳永さんはチェロで人を笑顔にする。それで。

T:みんな分かる?徳永さんの役目は?

C:チェロで人を楽しませたり、幸せな気持ちにさせること。

C:それが好きだから納得できる

T:人の役目はその人が好きじゃないといけないの?

C:する時ってそれがすきなこと

C:無理にやらせても自分の壁を超えない

C:本人の意思で納得できるならいい。

T:どういうこと?みんな聞いてみて

C:徳永さんみたいに得意なことがある人は役目があると思うけど、役目があるから命があるのではないか

T:命があるから役目がある?

C:何もできない人は役目がないの?徳永さんだけが特別なんじゃないかな?

T:ホスピスで寝ている人は役目がない?

C:自分が好きなこと、人に役目があると思うけど。自分が好きなことが分からないのにどうすれば。

C:自分が好きな事っていうのは自分の命より大切って思わないと全うできない。

T:好きなことが自分の命より大切になっていくってこと?

C:うん。

C:自分の命より大切っていうと好きなことっていう言い方が違うかもしれないけど、全員好きな事って1個あると思うけど、命より大事っていうことは好きなものっていうと少し違ってしまいうけど、人のためにすること。そうになると、人の命が自分の命よりも大切っていう人がいるかもしれないけど、人のためにするんだけど、自分がそういう経験をしているからってこと。前の授業のおり紙の時もやなせたかしさんもそうだけど、東日本大震災とか世界各地を回って争いとかを知っているから、だれかのためにやなせたかしさんのにもあったけど、自分の命を少しけげずとも相手のためにすることで全員の命を大切にしている。自分だけの命だけじゃなくて、そのために自分がすることで、周りの人も命を大切にできる。

T:どうですか?

【授業記録 展開中心】

れた場面であった。このコンサートについての問いで考えたことを基に、徳永さんの姿としての「精一杯生きるとはどういうことであるのか」について話し合った。「挑戦し続ける」「限界まで」「あきらめない」「周りの人を笑顔にする」「努力し続けること」などの「希望・努力」「よりよく生きる喜び」「感謝」について関連する発言があった。ここでさらに子どもから新たな価値を生み出すために、意識調査の結果をもとに子どもたちの考えに揺さぶりをかけた。「みんなの意識調査からは命は大切とあったけど、みんなの考えからだと、徳永さんは無理しないでということではないのか。そう考えると徳永さんは命を大事にしていると言えるのか」と人物の生き方と自分たちの生命についての考えとのズレを元に発問した。ここから子どもたちはさらに考えを深めていく。授業記録の下線部にあるように「命があることに役目がある」という子どもの意見から話し合いが深まっていった。この言葉の意味がよく理解できない子たちもおり、それぞれの立場から意見を重ね合っていた。「自分の命の役目」という考え方については授業者にとっても「生命の尊さ」の価値について考えたことがなかった発言であり、児童とともに考える時間帯であった。この「命の役目を果たす」は、前向きな思いで自分の命の役目を考え、命に与えられた役目を果たすことが自分の生きる喜びとなると理解できる。「自分が好きなことがわからないのにどうすれば」という子どもの今の自分の状況を見つめた素直の発言によって、他の子どももさらに考えている様子であり、子ども同士が互いに疑問をつなぎ合わせている印象であった。ここで子どもたちがどの程度自分なりの納得解をもつことができたかはわからないが、それぞれにとって考える問いであったことは確かであった。この話し合いの後、「精一杯生きることが他者にどのような影響を与えていくのか」ということについても考えをさらに深めさせたいと考え、「徳永さんがコンサートをしたことでホスピスの人たちの命はどうなったのだろうか。周りの人はどのように思いをしていると思うか」と問うた。子どもたちからは「治療がある時とかにがんばる気持ち」「徳永さんのコンサートで前向きになり、最後の時も安心できる」と他者への「希望・勇気」にまで影響を及ぼすことを理解することができた。

図 2 児童の振り返り

図 3 児童の振り返り

学習のまとめとして「精一杯生きるとは」と「今までの自分を振り返って絶対残しておきたい言葉」を書かせた。「精一杯生きるとは」については図 2 のような内容項目「希望・努力」に関する内容の記述が多く見られた。また図 3 のような「他者を幸せにする」など相手の幸せが自分の幸せにもなり、それが生きる喜びともなるという内容項目「よりよく生きる喜び」に関連する記述も多く見られた。児童が「精一杯生きる」徳永さんの生き方から「精一杯生きる」という価値に内在する多面的な価値について考

えることができたといえる。「今までの自分を振り返って絶対残しておきたい言葉」については「命を大切にする」といった「生命の尊さ」に関する記述、「自分の壁をこえる」といった「希望・努力」に関する記述が見られた。「よりよく生きる喜び」に関連する「役目を果たす」の記述も見られた。

5 成果と課題

(1)成果

・同じ教材と道徳的価値で2時間の授業を設計したことにより、児童は教材と道徳的価値のそれぞれについて考えを深めることができる。「生命の尊さ」の価値に内在する他の道徳的価値についても考えを広げることができた。

・Forms を使用し、道徳的価値に対する児童の考えを集約し、個々の考えを視覚として捉えさせて比較させたことによって、テーマを自分ごととしてとらえることができた。

・展開における授業者の子どもの考えをさらに深めさせる切り返しの発問を適切に行ったことによって、子どもたちの考えを広げることができた。また図4のように子どもの発言を構造的に板書したことによって、それぞれの発問から考えを巡らせることができた。

(2)課題

・道徳の時間は一主題一時間である理由としては「教科書」の存在も欠かせない。多くの教科書会社は「一主題一時間」で教材が設定されている。本実践の教材は教科書であるため、一時間として設定されているが、年間35時間の道徳授業の中で複数時間の授業を教科書とカリキュラムとの整合性からどう設定していくか検討していく必要がある。

・子どもの学びの深まりについては「授業の発言」「児童の記述」を基にして述べているが、質的・量的の両方の視点から個々の成長を把握し分析するための手立てを考慮していく必要がある。



図4 2時間目板書

【註釈】

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説道徳編」(平成20年6月)東洋館出版2008年 p,70
- 2) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編」(平成27年7月)東洋館出版2015年 p,70
- 3) 藤田昌士(1985)『道徳教育 その歴史・現状・課題』エイデル研究所 p,215-216
- 4) 塩見剛一(2009)「(1)読み物資料・視聴覚機器の利用」広岡義之『新しい道徳教育—理論と実践—』ミネルヴァ書房 p,114
- 5) 佐藤幸司(2009)「小学校の道徳教育はどのように行われているのだろうか」沼田裕之、増淵幸男、伊勢孝之『道徳教育 21の問い』一部引用 福村出版 p,215
- 6) 同上
- 7) 文部省「小学校学習指導要領解説道徳編」(平成11年5月)国立印刷局1999年 p,75
- 8) 新宮弘識(1986)「道徳授業の活性化のために」『教育研究』2月号筑波大学附属小学校 p,28-31
- 9) 押谷由夫(1994)「道徳教育新時代 生きる喜びを子どもたちに」国士社 p,142
- 10) 文部省「小学校学習指導要領解説道徳編」(平成11年5月)国立印刷局1999年 p,75
- 11) 文部科学省「小学校学習指導要領解説道徳編」(平成20年6月)東洋館出版2008年 p,70
- 12) 田沼茂紀(2022)「道徳科教育学の構想とその展開」北樹出版 p,147-151